

【文部科学大臣賞：中学生の部】

「個性を認めて支え合う社会へ」

群馬県・群馬大学教育学部附属中学校
3年 根岸 美葉 さん

私には5つ違いの特別支援学級に通う弟がいる。弟は歩き出しや言葉を発するのが遅く、今でも全体的な遅れがある。幼い時は今より手がかかり、両親は大変だったようだ。そんな話を聞けば、弟を「特別な子」と思うかもしれないが、私にとってはたった一人のかけがえのない弟だ。もちろん家族の中にも壁などない。私たちは弟の個性を理解し、受け入れている。弟がいることで家族に「笑顔の輪」が広がり元気をもらえる。弟は私たち家族にとって、なくてはならない存在なのだ。

弟は、いつ誰に対しても笑顔で接する。父が仕事に出掛けるとき「パパ、お仕事がんばってね。」と手を振り、食事のときには「おいしいご飯を作ってくれてありがとう。」と母に感謝の意を伝える。私が部活から疲れて帰宅すると「おかえり。」と玄関まで出迎え、重いカバンを運んでくれる。祖父には「ゴルフ上手だね。」祖母には「お洋服きれいだね。」などと自然に相手を褒め、皆を笑顔にさせる。だから弟は多くの人と仲良くなる。公園で近所の方にグランドゴルフへ入れてもらうこともあるようだ。また、お正月に親戚が集まると皆にかわいがられ、そこには「笑顔の輪」が広がる。

私はそんな弟をひそかに羨ましいと思っている。私には弟のように素直な気持ちを伝えることができないからだ。人を褒めたり、感謝の気持ちを伝えたりすることに対して恥ずかしい気がしてしまう。しかし弟には、私のような考えはなく、いつも「ありのままの自分」でいられる。それこそが弟の長所であり、まわりの人が笑顔になる理由なのではないか。もちろん弟にも短所はある。「宿題したくない。」と母を困らせているのは毎日のことだ。他にも帽子を木の上へ飛ばしてしまったり、調子に乗りすぎたりしてしまうことも多い。

弟にはもう一つ、得意としていることがある。それは歌うことだ。音程をとることがうまく声も良い。私がピアノ伴奏をし弟がよく歌を歌う。弟は障がいのある人たちの和太鼓チームに所属しており、年に一度ファミリーパフォーマンス大会という得意なことを発表する大会がある。毎年、私も弟と2人で参加する。今年も私の伴奏と弟の歌で参加したのだが、本番で弟が緊張し声が出なくなってしまった。私はどうしようと不安に思った。すると会場にいる弟の仲間やその家族が手拍子で応援してくれたのだ。弟はそれに励まされ、緊張が和らいでい

った。そしていつものように元気な歌声が会場に響き、2人で演奏を楽しむことができた。

私はこの出来事をきっかけに、将来のことについて考えるようになった。障がいのある人もない人もそれぞれが得意な分野や自分ができることを努力し、それでも困ったときには、まわりの人に支えてもらう。私たちが会場から手拍子をももらったように。

人にはそれぞれ良さがあり、一人一人に個性がある。弟のような子は「特別な子」と思うかもしれないがそれぞれの個性を考えると「普通の子」などいないのではないか。発達に遅れはあるが人を笑顔にする歌が得意な弟、恥ずかしがりやだがピアノが得意な私、料理が得意な母、ひょうきんな父。いろいろな人がいて成り立っているこの社会には障がいのあるなしの壁などいらぬのではないか。皆が互いに関わり合い、相手を知り、理解することこそが最も大切であると思う。

弟には、これからも「笑顔の輪」を広げて行ってほしい。また、困ったときには家族をはじめとするまわりの人たちと助け合い、支え合っていきたい。私はこれからの長い時を弟と共に過ごすことになるだろう。困難は多くあると思うが、どんなときも姉弟として、社会の一員として、個性を認め合いそして笑顔を忘れずに助け合っていきたい。

弟へ、「共に歩んでいこう。」